

できる。長い長い二年間の抑留生活に終止符を打つことができた。

シベリア抑留記

京都府 林 至

生年月日 大正十五年二月二十七日

現住所 京都府船井郡丹波町字院内小字市庭十一番

地の一

元陸軍二等兵

満州黒龍江省白城県大仙義勇隊開拓団より昭和二十年七月十五日召集される。通化工兵隊へ入隊。当時は独身。初年兵訓練を受けながら山岳地に陣地構築をする。ソ連軍が先端を切って国境線を突破した場合は通化を第二の拠点として防衛する計画だと聞いた。

八月十五日、終戦の詔勅を部隊のラジオで聴いた。応召してまだ一カ月、張りつめていた緊張が音をたてて崩れるようガククリとした気持ちになった。

武装解除は十月中旬ごろであった。

昭和二十年十月中旬、黒河からソ連領ブラゴエシチュンスクへ黒龍江を渡る。抑留されたところは、ここより約一千八百キロ西方に世界有数のバイカル湖があり、その西にあるイルクーツクという州都が拠点であった。収容所はこの街から自動車で五十分余りのところであり、以前ドイツ兵捕虜を収容していた粗末な建物へ我々はいれられた。狭い部屋でゆっくり足も伸ばせない。それから二年間、場所や労務は変わっても昼夜ソ連兵の監視のもとに労働を強制されることになった。この収容所に入れられたのは三個小隊、合計三百人ほどであった。

労務はその日によって、いろいろ変わることがあるが、主として煉瓦製造工場の雑役である。大型の運搬車に原料の土砂をスコップで積み込む者、積み終わった運搬車を工場の中へ押して行く者。一台に積み終わっても次の空車が待っている。休む間もない。汗が目にしみる。シベリアの夏は身が焼けるように暑い。食事の量が少ないので終日空腹だった。朝食は青いトマト

の入ったスープ（塩汁）とシャブシャブの雑穀粥が飯盒のふたに一杯、だから昼食用の黒パン三百グラムも食べてしまう。工場の中の作業では焼き上がった煉瓦を倉庫へ一輪車で運び出す。十分積まないとソ連人の監督が怒鳴る。空きっ腹に一輪車運搬はこたえる。こうして一日が終わる。

冬の労役

大地が石のように凍り川の水も凍りついて、その上をトラックが楽々と通れる厳冬になると山へ伐採に入った。

火力発電所の燃料になる松材の伐採で現場には半地下式の小屋があり、ここに寝泊まりする。衣服は現地人の着る綿の入った労働服だった。

積雪の中で直径五〇センチから一メートルもある松の巨木を二人挽きの鋸で挽き倒して枝を払う。この作業も重労働だった。相変わらず食料は乏しい。抑留二年目もこのような労役が続いた。

内地帰還

昭和二十二年四月下旬、ナホトカに入った。五月上

旬、日の丸の旗を掲げた引揚船が港へ入って来た。本当に帰ることができるのだ。思わず「萬歳」と叫んだ。数日後舞鶴港へ上陸した。

生きて日本へ帰れた。

初夏の風が嬉しかった。

思　い　出

滋賀県　水野　清　一

奉天の社宅の庭は明るかった。私たちは結婚して一年半、長女の由紀子が誕生して、やっと半年になったところだ。戦時下と言っても新婚生活は楽しいものであった。そうした中へ二度目の召集令状が届けられた。入隊先は撫順の第四百十旅団の通信隊であった。昭和二十年七月、終戦一カ月前のことであったが、妻子と友人に付き添われて元氣に入隊したのであった。

まず入隊して驚いたのは、この軍隊には兵隊が一人もないことであった。集まったのは中隊長以下全員